岡山大学教育学部 音楽教育講座

第 70 回

定期演奏会

日時　収録 2022 年 12 月 11 日(日)

配信 2022 年 12 月 26 日(月)18:00 頃

場所　Junko Fukutake Hall(ご来場いただけません)

主催:岡山大学教育学部音楽教育講座

後援:岡山市・岡山市教育委員会・山陽新聞社・岡山大学教育学部音楽教室音楽教育講座蒼声会共催:(公財)

収録：国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座 5D Lab.

講座代表ごあいさつ

本日は、第 70 回岡山大学教育学部音楽教育講座定期演奏会のオンデマンド配信をご視聴いただき、誠に有難うございます。本年は、コロナ感染症が未だ十分収束していないため、一昨年と同様に、オンデマンド配信の形でご御覧頂くことと致しました。

定期演奏会のこれまでの歴史を振り返ってみますと、第 1 回は、岡山大学が開学して 4 年目の昭和 28 年(1953 年)に、岡山市公会堂で開催され、歌劇「ファウスト」が演奏会形式で上演されました。それ以降、第 8 回までは、オーケストラ演奏やオペラ制作の形で実施され、その後、オーケストラは吹奏楽と弦楽合奏に分かれ、吹奏楽、弦楽合奏、合唱という 3 部構成となり、平成 17 年(2005 年)の第 53 回からは、前半がソロ演奏、後半は吹奏楽とミュージカル・オペラ・合唱が隔年で開催されるという形になりました。

さて、今後に目を向けますと、令和 5 年度から、教育学部では新カリキュラムの実施が予定されており、教員養成教育そのものが大きな変革の時代を迎えます。その中にあっても、音楽教育講座は、仲間が集い、音楽で絆が深まっていく場になりますことを切に願っております。

今年のプログラムは、前半は、4 年生を中心としたソロ演奏や作品発表、後半は、齊藤武作曲の新曲『蕃山讃歌』の 2 部構成となっております。本日の演奏会に向けて、学生たち一人ひとりが音楽と真摯に向き合い、学生も教員も努力を重ねてまいりました。最後までお聴きいただければ幸いでございます。

今後とも音楽教育講座への変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

岡山大学教育学部音楽教育講座代表
虫明眞砂子

実行委員長ごあいさつ

本日はお忙しい中、岡山大学教育学部音楽教育講座第 70 回定期演奏会をご視聴頂きまして誠にありがとうございます。

現在、音楽教育講座には、学部生 40 名、院生 6 名(修士課程 5 名・教職大学院 1 名)、連合大学院生(博士課程)6 名が所属しております。私たちの講座は学生を主体とした様々な活動を行っており、今年に入って、 2 月に卒業演奏会、6 月には学生主催のユニコンサートを行いました。現在は新型コロナウイルスの影響で行うことができていませんが、以前はそのほかにも附属特別支援学校での依頼演奏や附属幼稚園でのひな祭りコンサートなども行っておりました。

今年の定期演奏会は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、無観客でオンデマンド配信となりました。今回は、第 1 部では学部 4 回生と大学院 2 回生によるソロ演奏を、第 2 部では齊藤武教授作曲の新曲を合奏でお届けいたします。

講座の先生方や、多くの方々のご指導・ご支援を賜りまして、今年も定期演奏会を開催することができました。最後になりましたが、ご指導・ご支援くださいました皆様、そして、演奏をご視聴して頂くお客様に、心より厚く御礼申し上げます。今後も岡山大学教育学部音楽教育講座をよろしくお願いいたします。

それでは、どうぞごゆっくりお楽しみください。

第 70 回定期演奏会実行委員長
川﨑佳穂

PROGRAM

◆第 1 部

●川村 太一　作品発表《国盗り物語》〈1. 斎藤 道三〉……　Pf. 川村 太一(4)

●C.M.ヴィドール　クラリネット独奏

《序奏とロンド　Op.72》……　Cl. 林 明日香(4)

Pf. 磯野 真緒(2)

●田中 稜也　作品発表《Concert Fantastique》……　Perc. 田中 稜也(4)

Sax. 佐藤　優 (3)

●C.フランク　ピアノ独奏

《前奏曲・アリアとフィナーレ》……　Pf. 榊原 帆乃夏(4)

●河下 千織　作品発表《Universe》……　Vib. 河下 千織(4)

●N.カプースチン　ピアノ独奏《ピアノソナタ第 6 番 Op.62》……　Pf. 寺迫 優子(4)

●下山 小春　作品発表《月に咲くヴァンパイア》〈1.ヴァンパイア〉

〈2.至福〉〈3.死、そして…〉……　Syn. 下山 小春(4)

Pf. 川村 太一(4)

●中田 喜直　ソプラノ独唱《さくら横ちょう》……　Sop. 岸本 未有(M2)

●小林 秀雄　《すてきな春に》……　Pf. 吉田 萌華(2)

◆第 2 部

●齊藤 武　新曲『蕃山讃歌』　~管弦打和楽器と女性コーラスのための~

PROGRAM NOTE

◆第 1 部

《国盗り物語》〈1.斎藤道三〉　川村太一

この作品は司馬遼太郎による歴史小説『国盗り物語』で描かれる戦国大名・斎藤道三をイメージして作曲したものです。油売りの商人から美濃の国主へと上り詰めた道三は戦国時代の下剋上を体現した革命的な人物といえるでしょう。司馬遼太郎が描いた、知恵と行動力で自らの人生を切り開く斎藤道三の姿がこの作品に大きな影響を与えています。

全体を通して曲想が次々に変化していくよう意識して曲を構成しました。冒頭は仏教声楽の声明を思わせる厳かな雰囲気から始まりますが、盛り上がりをみせた後は全く違うモチーフへと移ります。曲中ミニマルミュージックやピアノソロなど様々に曲想が変化していきますが、最終的には冒頭の声明が再現され曲は終りを迎えます。曲の構成にあたっては、次々に名前を変えながら上り詰めていく斎藤道三の姿、いつ誰が脅威となるかわからない戦国時代という時代性をイメージしました。

「蝮の道三」とも評され日本史の中では悪役のイメージが強い斎藤道三ですが、司馬遼太郎は小説の中で彼を人の関心を惹きつける魅力的な人物として描いています。この作品においても戦国武将・既存勢力の破壊者としての面だけではなく、斎藤道三という人物としての全体像を描きたいと思います。

小説『国盗り物語』は高校生の時からの愛読書です。司馬遼太郎と斎藤道三の二人に敬意を表して演奏させていただきます。(川村太一)

《参考》　・司馬遼太郎,『国盗り物語(四)―織田信長(後編)―』新潮社,1971.
・新潮文庫,『文豪ナビ 司馬遼太郎』新潮社,2021.

《序奏とロンド　Op.72》　CH.-M.ヴィドール

ヴィドール(1844-1937)は、フランスのオルガニスト、作曲家である。1863 年にベルギーのブリュッセル音楽院に留学。J.N.レメンスにオルガンを、F.フェティスに作曲を学び、1869 年から 1934 年までパリのサン=シュルピス教会のオルガニストを務める。1891 年からはパリ音楽院の教授となり、フランクの後任としてオルガンを、デュボワの後任として作曲を教える。彼の 10 曲のオルガン交響曲は、フランス・オルガン音楽に新しい道を切り開いた。他に舞台作品やピアノ曲、室内楽曲、協奏曲も作曲する。

《序奏とロンド》は、1898 年にパリ音楽院クラリネット科教授ローズの依頼により作曲された同音楽院の試験曲で、速いパッセージや揺れ動くテンポが特徴的である。1 オクターブを超える跳躍の連続から始まり、美しくのびやかな序奏が歌われる。ロンドはアレグロで、主題が間奏を挟みながら繰り返される。中間部にはおどけたような 8 分音符の連続やドラマチックなメロディーがあり、連符やスタッカートでたたみかけるように力強くフィナーレを迎える。1 曲の中で様々な表情を見せる自由で遊び心のある作品である。(林明日香)

《参考》・『新編音楽中辞典』音楽之友社　2002 年

《Concert Fantastique》 田中稜也

この作品は吹奏楽と独奏サキソフォンのための幻想的協奏曲です。曲名を英訳すると「ファンタスティック・コンチェルト」になるわけですが「素晴らしい協奏曲」と自画自賛しているわけではありません。先人の息を呑むほど美しく精緻で完璧な音楽を耳にするたびに自分が作曲する意味を見失い、葛藤しながら作った作品です。

この作品は、とある民謡音楽の催しで聴いたブルガリアの民謡「セディドンカ」を素材として用いています。この民謡は 25 拍子(3+2+2/3+2+2/2+2/3+2+2)の音楽で、使われている音階もロマ音階のような一風変わったものです。この民謡を一般的な変奏曲とは大きく異なり、見つけづらい形で素材として用いています。曲中では民謡を粉々に分解した要素が集まっては拡散していきます。そんな要素の離合集散を横目に見ながら、我も我もと曲想がかなり自由に変容していきます。そして最後に種明かしのように「セディドンカ」が姿を現します。

また、吹奏楽は 1 つの音楽のジャンルとして扱われることもありますが楽器編成の区分であり、吹奏楽編曲も含めるとジャズやラテン、ロックなど多様なジャンルの音楽を含みます。その面を生かし、作品にいくつかのジャンルの音楽を取り込みました。

今回は吹奏楽の音源、サックス、パーカッションの演奏でお送りいたします。(田中稜也)

《参考》・関口義人, バルカン音楽ガイド, 青弓社, 2003, p.102

・Jonathan Bousfield, Dan Richardson and Richard Watkins, *Bulgaria*, Rough Guides, 2002, p.472

・Rechberger Herman, *Balkania*, Fennica Gehrman, 2016, p.111

《前奏曲・アリアとフィナーレ》より〈前奏曲〉　C.フランク

セザール・フランク(1822~1890)は 19 世紀のフランスで活躍した作曲家、オルガニストである。ベルギーに生まれ、11 歳の時にピアニストとして母国で演奏旅行を行い、リエージュ王立音楽院を卒業した。1835 年に一家でパリに移住し、パリ音楽院において作曲、ピアノ、オルガンなどを学んだ。青年時代までに作曲された大部分がピアノ曲であったが、1845 年からの約 40 年間はピアノ曲を全く書かなくなる。信仰心の厚い人物だったフランクは、1848 年からは教会のオルガン奏者として独立し、名声を獲得した。やがてパリ音楽院のオルガン科教授として招かれ、教鞭をとった。60 歳を過ぎてからピアノ曲の作曲を再開したが、ワーグナーから影響を受けた和声、革新的な構造、格調高い叙情性を特徴とするフランクの晩年の傑作は、後のフランスの作曲家たちに強い影響を与えた。

《前奏曲・アリアとフィナーレ》は 1886 年から 1887 年に作曲され、翌年 5 月 12 日に国民音楽協会にてボールド・ペーヌ夫人によって初演された。彼女はこの曲を献呈された人物であり、フランクの熱心な宣伝者でもあった。全三楽章から構成されており、楽曲全体を通して各モティーフが相互に関連しつつも、それぞれが独立している。

〈前奏曲〉は 10 度以上の和音が多用されており、これはオルガンや合唱音楽の重厚な音響効果を知るフランクならではの特徴である。冒頭に威厳と、優美と、信仰の喜悦と感謝と、そして幸福感に満ち、しかも情熱をうちに秘めた、ゆるやかな行進曲のような主題が提示され、繰り返される。コルトー(1877-1962)はこの主題をピエロ・デラ・フランチェスカの名画に例えているように、宗教的な祈りの雰囲気が感じられる。主題が転調を伴って変奏される合間に、エネルギッシュなユニゾン部分などを挟みながら、最後は堂々とした終止を迎える。　(榊原帆乃夏)

《参考》・松上宏之・他編,芳野靖夫監修,松村哲哉訳『THE COMPLETE CLASSICAL MUSIC GUIDE クラシック作曲家大全　より深く楽しむために』日東書院,2013 年,145 頁
・淺香淳編『新編　世界大音楽全集　器楽編 46　フランス・ピアノ曲集Ⅰ』音楽之友社,1993 年,214 頁
・アルフレッド・コルトー著,安川定男,安川加壽子訳『フランス・ピアノ音楽Ⅰ』音楽之友社,1995 年

《Universe》　　河下千織

ビブラフォンは各音板の下に金属製の共鳴筒がついている。共鳴筒のなかには心棒が横に通り、心棒の先端はモーターにつながっている。各共鳴筒のなかの心棒にはファン(羽根)がついていて、モーターを回すと共鳴筒のなかでファンが回転する。共鳴筒に響いた残響はファンの回転によってヴィブラートがかけられ、ビブラフォン独自の魅力ある音色をつくりだす。

この作品は、宇宙をイメージし、ビブラフォン独自の音色の響きを生かしたものにした。

イントロでは、コントラバスの弓で鍵盤を弾くボウイング奏法を用い、ビブラフォンの音色を充分に響かせるとともに、宇宙の静かで壮大でミステリアスな雰囲気を出せるよう、作り上げた。

中間部からは宇宙のよどみない時の流れと複雑さを増し、混沌としていく宇宙の様子を音に表した。(河下千織)

《参考》　・『新版打楽器事典』　網代景介　岡田知之　音楽之友社,1981 年

《ピアノソナタ第 6 番 Op.62》　N.カプースチン

ニコライ・カプースチン(1937~2020)は、ロシアの作曲家、ピアニストである。小さい頃からピアノ・作曲に興味を持ち始め、14 歳の時にモスクワに出て本格的なピアノの修業を開始する。音楽高等学校にて A.ルッバーフに、続いてモスクワ音楽院ピアノ科で A.ゴリデンヴェイゼルに師事。高校時代にジャズを聴いて強く心を引かれる。この頃から作曲を始め、その後ジャズ・オーケストラのメンバーになり、作曲家・ピアニストとして活躍した。オーケストラやビッグバンドとピアノを中心とした作品、ピアノ協奏曲 6 曲、あらゆる楽器編成の室内楽、ほかに多数のピアノ曲がある。カプースチンの大きな特徴の一つは、ジャズとクラシックを融合した独特の作風を持つことである。本格的なクラシックの素地の上に、スウィング・ジャズからビバップ、ラテン、ロックなどさまざまな語法やリズムを用い、さらに現代音楽の感性を取り込んだ独自の書法に到達した。この新しいピアニズムは類例を見ないものとして、多くの音楽ファンを魅了している。

《ピアノソナタ第 6 番 Op.62》は、1991 年に作曲された。この曲は日本でのマルカンドレ・アムランによる初演がとても好評だった。3 楽章構成であり、ジャズの語法やリズムを吹き込んだクラッシック音楽となっている。カプースチンはこの曲で、人間の存在の大きな喜びを表現したと言われている。

第 1 楽章　Allegro ma non troppo(アレグロ・マ・ノン・トロッポ)　ソナタ形式。若々しい活気あるテンポとメロディーの中にジャズの要素が取り入れられたリズミカルな作品となっている。

第 2 楽章　Grave(グラーヴェ)　緩徐楽章。重々しく、荘重に進みながらも様々に表情を変化させていき、郷愁に浸っている様子が歌われている。

第 3 楽章　Vivace(ヴィヴァーチェ)　自由な形式で書かれ、ジャズのテイストを加えながら感情の紆余曲折が表現されている。フィナーレは、ブギウギとストライドを伴うエネルギッシュさと活気に満ちている。　(寺迫優子)

《参考》・https://enc.piano.or.jp/persons/572　(2022 年 10 月 20 日閲覧)
・https://www.ymm.co.jp/feature2/kapustin/　(2022 年 10 月 20 日閲覧)
・https://www.tutti.co.uk/l/kapustin-piano-sonatas　(2022 年 10 月 20 日閲覧)

《月に咲くヴァンパイア》

〈1. ヴァンパイア〉　〈2. 至福〉　〈3. 死、そして…〉　下山小春

この作品は、私が創作した物語を音楽で表現したものである。物語の流れを、以下に簡潔に示す。

〈ヴァンパイア〉とある森の奥深くにある洋館に、人目を避けてひっそりと暮らす男がいた。180 程もある身長に、色白い端正な顔立ち、艶やかな黒髪――極めて美しい容姿の、吸血鬼である。男は何百年もの間、ここで暮らしているのだった。

〈至福〉ある満月の夜、洋館の近くから美しい歌声が聞こえてきた。男が歌声のする場所へ行くと、そこで一人の少年と出会う。何度も会話を交わし少年と親しくなった男は、何百年も感じてこなかった幸福感を得ていった。しかし、自分が人間から恐れられている吸血鬼である、ということは言い出せなかった。少年が、自分のもとから離れていってしまうことを恐れたからである。男の、少年に対する吸血の欲求は皆無だった。こんな自分を怖がりもせず心を開いてくれた少年と一緒にいたい――ただそれだけだった。

〈死、そして…〉幸せな日々にも、いつしか終わりがくる。男がいつものように少年に会いに外出していた隙に、別の吸血鬼が少年を吸血してしまった。事を知り激怒した男はその吸血鬼を殺し、同時に、自分の幸せのために少年の側に居ようとした自分自身にも怒りを覚えた。吸血された人間は、吸血鬼となって蘇る。男は、少年がそうなる前に、自らの手で少年の首を落とした。そして自身も、何百年ぶりの日の光を浴びて、跡形もなく静かな森に消えていった。

今回は、ピアノとシンセサイザーで演奏する。〈ヴァンパイア〉では、私の中にある吸血鬼の印象を音楽にした。例えば、速いテンポは吸血鬼の格好良さ、管弦楽器は美しさ、シンセサイザーの音は吸血鬼という存在の不思議さを表現している。〈至福〉では、少年がうたう歌の旋律(以下、「少年の歌」と表記する)を主軸として音楽を展開する。少年(ピアノ)と男(チェロ)のデュエットでは、二人が幸せな時間を過ごす様子を表しているが、その後短調に移行することで、男の葛藤を描いている。〈死、そして…〉では、「少年の歌」をチェロのみで演奏し、亡くなった少年に、二人の思い出でもあるこの歌をレクイエムとして捧げる。その後の音楽には大きく盛り上がる部分は取り入れず、静かに終わりを迎えることにより、誰にも気づかれることなく一人で儚く散っていく男の姿を表現した。(下山小春)

《さくら横ちょう》　加藤周一(作詞)中田喜直(作曲)

《すてきな春に》　峯陽(作詞)小林秀雄(作曲)

<さくら横ちょう>の作曲者である中田喜直(1923~2000)は、<早春賦>の作曲者として知られる中田章を父とする。代表曲には、歌曲集《六つの子供の歌》や<桐の花>といった芸術歌曲のほか、<めだかの学校><小さい秋見つけた><夏の思い出>といった童謡や唱歌がある。作詩者である加藤周一(1919~2008)は、東京帝大医学部在学中より仏文学や日本の古典文学に深い関心を寄せ、文学グループ「マチネ・ポエティック」に参加する。<さくら横ちょう>は、全4曲で構成される《マチネ・ポエティックによる四つの歌曲》の2曲目であり、五・七調のソネット形式で作詞されている。同詩には、別宮貞雄も作曲している。「春の宵 さくらが咲くと~さくら横ちょう」の各2行を現実、「想出す~夢のふるさと」と「会い見る~花でも見よう」の各4行を恋の回想と空想とし、満開の桜のなかで、過ぎ去った恋の思い出を歌っている。

<すてきな春に>の作曲者である小林秀雄(1931~2017)は、代表曲に、声楽曲・合唱曲の<落葉松>や、童謡<まっかな秋>などがあげられる。小林の歌曲創作の理念は、多彩な響きの追求とコトバが明瞭に聞き取れるよう配慮したこととされる。そうすることで、ポピュラリティが得られ、声楽曲は歌らしくなるという自説を持つ。作詩者である峯陽(1932~)は、「ガンバリマンのうた」「おばけなんてないさ」など童謡作品も多い。<すてきな春に>は、これまでになかった“演奏会用アリア”として作曲された。春とともにおとずれた恋への思いと、愛することの歓びを高らかに歌いあげている。レチタティーヴォでは、間奏の間にもドラマを感じながら、語り、言葉の表情、間合いを大切にしたい。アリアでは、言葉のもつ力や流れを大切に、明るく豊かにオペラティックに歌いあげる。(岸本未有)

《参考》・昭和音楽大学歌曲研究所,大賀寛監修(2005)『解説付・日本歌曲集1』株式会社全音楽譜出社,p.161,p.181,pp.186-187.

・畑中良輔(1994)「小林秀雄とその作品」『日本歌曲集37　小林秀雄』音楽之友社, p.3.

・https://www.ritsumei.ac.jp/lib/b07/020/030/(2022/10/26検索)より要約。

「さくら横ちょう」

春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう

い出す　恋の昨日
君はもうここにゐないと
ああ　いつも　花の女王
ほほえんだ夢のふるさと

春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう

合い見るの時はなかろう
「その後どう」「しばらくねえ」と
言ったってはぢまらないと
心得て花でも見よう

春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう

「すてきな春に」

ある朝　わたしは町かどで
すてきな春にあいました
いきなり心がうろたえて
つぼみがジンとふくらんで

春が手紙をくれました
心で電話がなりました
やさしく腕をくみました
愛することのよろこびを
春がおしえてくれました

春の夜ふけの公園で
言葉が星になったとき
つぼみは花になりました

春が手紙をくれました
心で電話がなりました
あなたの胸でなきました
愛することのよろこびを
春がおしえてくれました

◆第２部

新曲『蕃山讃歌』　～管弦打和楽器と女性コーラスのための～ 斎藤武

この曲は約 400 年前、江戸時代初期、岡山藩で活躍した熊澤蕃山（1619-1691、幼名は左七郎）の詩を中心に据え構成した世俗的カンタータである。熊澤蕃山は京都生まれだが、岡山藩に請われ名君池田光政（1609-1682）の下で藩政改革に従事した。業績の主なものは、岡山が 1645 年大飢饉に襲われた時、一人の餓死者も出さなかった政策で有名になった他、優れた治山治水の技術で岡山藩さらに日本の多くの地に恵みをもたらした。楽曲構成は、蕃山の優れた思想の中心になっている３つの考え方「知行合一」「致良知」「天人合一」を循環する音楽として構想している。

第１章 「知行合一（ちこうごういつ)」知ることとは行動することと同じである。

蕃山の最大の功績は教育である。全国初の藩校花畠教場（跡地は現在岡山市立中央中学校、周辺一帯は蕃山町）を開校（1641）し、その後さらに現存する世界最古の庶民学校である国宝閑谷学校（1670)を和気に開校する礎を築く。教えは近江聖人中江藤樹（1608-1648)から受け継いだ陽明学（心学）儒教の一派を、さらに日本の神道と結びつけ独自の思想哲学を築いていった。多くの信奉者が出て優秀な人材が育って行く中で、愛弟子津田永忠（1640-1707）に受け継がれた土木技術と精神は百間川や後楽園、閑谷学校の建造へと開花する。備中松山藩の山田方谷（1805-1877）にも多大な影響を与え、江戸時代後期有名な財政改革の成功へ導く原動力となる。ただ同時にその革新的な考え方は、池田藩の老中達多くの反感を買い、さらに江戸幕府からも目をつけられることになる。池田光政に迷惑をかけないように閑谷学校近くにある蕃山（しげやま）に身を引き、地名と同名を音読しているのだが、執拗に攻めてくる幕府や岡山藩の反対派により、京都、明石、大分、奈良吉野山などを転々とし、最終地茨城県古河藩の預かりとなり、ここで岡山を偲んで詠んだ歌を第１章に使用している。

・老いの身の　見んこと難き故郷に　春まちえてや　帰る雁がね

・行く雁に　関はなくともおほやけの　いましめあれば　文も伝えじ

第２章　「致良知（ちりょうち)」人間の心は翳が無ければ本来良心である。良知を最大限に発動する。

蕃山は実は知られた音楽家でもあった。琵琶、箏、笛の名手であったという記録が残されている。作曲も手がけていたらしいが、即興的だったらしく楽譜は残念ながら残っていない。京都でたまたま通りを歩いていた雅楽の公家の一人が笛の音を聴いて、この笛の奏者は誰だ、只者では無いと従者に尋ねて来るように伝え、その後一緒に演奏したという話が残っている。そこで当時に想いを馳せ、イメージを膨らませながらフルートや箏のフレーズを入れている。また楽の音にちなんだ歌を第２章で使用している。

・雲のかかるは月のため　風の散らすは花のため　雲と風とのありてこそ月と花とはたふとけれ

・笛竹の調べかはらで千早振　神代の袖をかへす舞びと

第３章　「天人合一」天と人は究極繋がり一緒であり、その現象として人の心にインスピレーションが生まれる。

蕃山は各地で当時多くの人々を感化し続けた。終の地となった古河藩主松平忠之（1774-1795)は幽閉の身ではあるが、蕃山の話にあまりにも魅せられ、死に際し慟哭して手厚く葬ったと伝えられている。しかし魅せられたのは同時代の人々だけでは無かった。蕃山が蟄居中書き続けた書物（集義和書、大学或門等）は、その後 150 年幕末の長州吉田松陰（1830-1859)、薩摩の西郷隆盛（1828-1877)など薩長指導者の指針となったばかりでなく、幕府の勝海舟（1823-1899)に「儒服を着けた英雄」とまで言わしめ、明治近代日本に突き進む思想的原動力になったのである。日本思想史の研究者には、後にも先にもまだ熊澤蕃山より優れた思想家は日本に現れていないと評しているほどである。用いた詩は以下である。

・憂きことのなおこの上に積もれかし　限りある身の力ためさん

・人は咎むとも咎めじ　人は怒るとも怒らじ

蕃山の代名詞となっているこの歌は、中学生の時学んだのだが、こんな事絶対いやだと強烈に思った記憶がある。しかし最近ずっと唱えているとある時、憂きことが浮きこと、浮き浮きする事、ワクワクすることに変えて行けると、どんどん積もって来たら凄く楽しくて、限りある身の力試さんという積極性がすんなり生まれると思い直した。蕃山先生の意図とは異なるかも知れないが、それで良いかもしれないと思うようになり全曲を統一するテーマも生まれた。人は咎むともは、やはり最初理解できなかったが、心の有り様の捉え方だとわかり、この楽曲全体の循環を構想できた。熊澤蕃山という偉大なる先人を仰ぎ見て、若く最も充実した日々を過ごし、晩年思慕を募らせたこの岡山で、作曲者にとっても大学教員としてのキャリアを終える前にこの楽曲を作曲できたこと、今年度の音楽教育講座で諸田准教授の下、学生達が様々に演奏に携わってもらえることは感無量である。蕃山は蕃山（しげやま）の名の由来を以下に述べている。「山川は国の本なり」木草しげき山は、土砂を川中に落とさず。木草に水を含みて、十日も二十日も自然に川に出るゆえに

かたがたもって水害の憂いなし。山に草木なければ、土砂川中に入りて川床高くなり候。大雨を預（たゆと）ふべき草木無き故に、一度に川に落入。しかも川床高ければ、水害の憂いあり。

　岡山は災害が少なく住みやすいという評価は全国的に知られている。その一端を担っているのは、間違いなく熊澤蕃山から引き継がれている岡山行政の、治水に対する知恵と信念であると思われる。

（齊藤　武）

〈女性コーラス〉田枝更紗(3)/寺田彩乃(3)/大屋青未(2)/貝野瑞紀(2)/坂本真帆(2)/
吉田萌華(2)
横溝結香(2)/上村芽生(1)/頃安野々花(1)/松本さわ子(1)/
生田うらら(1)

〈合奏〉　Fl.池本ゆり(3)/山下愛海(1)/A.Sax.安井遥(4)/豊田乃々華(1)/
T.Sax.佐藤優(3)
Cl.林明日香(4)/榊原帆乃夏(4)/野村萌々子(3)/森口七穂(1)/
B.Cl.下山小春(4)
Hr.徳田旭昭(M2)/川﨑佳穂(3)/Tb.川村太一(4)/段王美咲(2)/
Euph.田中梨乃(2)
Tub.井口奈緒(1)
Perc.田中稜也(4)/河下千織(4)/バスマスター 岡美空(3)/Pf.小川春風(4)
Vn.中谷扇理(3)/磯野真緒(2)/岡崎美瀬(1)
第一箏.妹尾綺夏(2)/第二箏.洪水結衣(2)
マネージメント.樋口舞衣(4)/寺迫優子(4)/梅野真奈美(3)/木下水彩(3)

第 70 回定期演奏会実行委員会

実行委員長 : 川﨑 佳穂(3 年)
補 佐 : 吉田 萌華(2 年)
副実行委員長 : 池本 ゆり(3 年)
補 佐 : 横溝 結香(2 年)
会　計 : 野村 萌々子(3 年)
妹尾 綺夏(2 年)
広　報 : 中谷 扇里(3 年)
梅野 真奈美(3 年)
木下 水彩(3 年)
佐藤 優(3 年)
大屋 青未 (2 年)
段王 美咲 (2 年)
洪水 結衣(2 年)
坂本 真帆(2 年)
渉　外 : 中谷 扇理(3 年)
磯野 真緒(2 年)
貝野 瑞紀 (2 年)

岡山大学教育学部 音楽教育講座

岡山大学教育学部 音楽教育講座教員
器　　楽 : 長岡 功(ピアノ)
: 諸田 大輔(管楽器・演奏担当)
声　　楽 : 虫明 眞砂子(演奏担当)
作　　曲 : 齊藤 武
音 楽 科 教 育 : 小川 容子
: 早川 倫子

国吉講座　撮影メンバー

撮影・編集 : 才士 真司
録音・整音・仕上げ : 佐々木 紳
政策統括 : 伊藤 駿
撮影・編集 : 黒田 智子(文学部)
斎藤 果歩(工学部)

制作助手 : 永田久美(グローバル・ディスカバリー・プログラム)
撮影助手 : 西尾靖夏(経済学部)
森和佳奈(文学部)
録音助手 : 桑本 知子(文学部)